



# 科学の眼

まなこ

発行: 姫路科学館 (〒671-2222 姫路市青山 1470-15 電話: 079-267-3961)  
<http://www.city.himeji.lg.jp/atom/>

## 生物シリーズ

黒田官兵衛の家伝の目薬

### メグスリノキ (カエデ科)

*Acer maximowiczianum*

姫路市立御国野小学校長 古角 孝之

本種(図1)は、青森県・秋田県を除く本州全域、四国、宮崎県・鹿児島県・沖縄県を除く九州の標高約700m以上の産地に自生し、高さ約10~25mにもなる日本特産の落葉高木です。

葉は対生で、長い柄のある三出複葉になっています。小葉は全縁もしくは波形の鋸歯があります。樹皮は灰褐色または褐色で、新しい枝や葉柄には粗い毛が密生しています。雌雄異株で、5~6月頃、黄緑色の5裂した花卉の花を咲かせます。果実は比較的大きな翼果(約3~4cm)で、秋に結実します。

本種は、目の病気に効能があると知られているところから、「目薬の木」と名がつけました。司馬遼太郎の「播磨灘物語」には、戦国時代の名将、黒田如水

(官兵衛)の祖父である重隆(黒田家廟所:御国野町御着)が、室町時代末期に、本種で目薬を作り、巨万の富を得たことが記述されています。家伝の目薬は、本種の樹皮を砕いて、それを赤い絹の袋で包み、さらに大ハマグリ(ハマグリ科)の貝殻の容器に入れたものでした。それを煎じた汁で目を洗うことで、目のかゆみやひどい目やにに抜群の効果を発揮したので、これで財産を築いたそうです。



図1

## ■メグスリノキの別名

『長者の木』

翼果が、風に舞う様子から蝶の木、これが転訛してこの名がつく。

『千里眼の木』

福島県相馬地方の山には多く自生していて、目がかすむような時には、樹皮を薬にして服用したり、樹皮や小枝を煎じて飲んだりすると、遠方まではっきり見えるようになる。ところからこう呼ばれるようになる。

『三つ花（ミツバナ）』『ハナカエデ』

葉が三出複葉で、秋に美しく紅葉するところからこの名がつく。

## ■薬効

5～6月頃の開花期の葉や小枝を採取して、粗く刻んで日干しにしたもの



◎煎じ薬の服用、煎じ液で洗顔（有効成分：カテキン）

・目の病気（眼の充血・視力低下・ただれ目・角膜炎・ものもらい・白内障）

◎煎じ薬の服用（有効成分：ロドデンドロール）

・肝炎、輸血によるB型肝炎

※服用の仕方

○煎じ薬を服用

○粉末を服用

・そのものだけを服用（味の苦手な方はオブラートに包む）

・牛乳、野菜ジュース、スープなどに混ぜて服用

・小麦粉と混ぜて料理に使用

## ■薬「目薬の木(メグスリノキ)」の歴史

○室町時代末期～江戸時代初期

北近江（滋賀県）、京都、播磨地方において評判になる。

○江戸時代

全国的にもてはやされる。

○明治時代以降

西洋医学の浸透につれ、一般に忘れられた存在となる。



現在でも山間部では珍重されていたり、眼病平癒で有名なお寺ではこの煎じ茶をふるまったりしているところもある。また、「目薬の木茶」「メグスリノキの飴」などがネットで販売されている。

